
僕達の探偵ごっこ

山田 太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕達の探偵ごっこ

【Nコード】

N1738I

【作者名】

山田 太郎

【あらすじ】

気になるあの子の身辺調査から次のテスト問題まであなたのお悩み何でも解決致します。新聞部を隠れ蓑にして部員の浅井直之と部長の岡野弘樹はそんなキャッチフレーズを使い知る人ぞ知る探偵事務所を開いていた。

舞い込む依頼と言えば中学生らしいことばかりだったが、ある日、担任の石垣からとある事件の解決を依頼されてしまい……！？

特に取り柄と言える取り柄はないが常識人の浅井と成績優秀、運動

神経抜群、容姿端麗の三大モテ要素を兼ね備えてはいるが非常識人の岡野。ズッコケコンビが贈る田舎町を舞台にした探偵ごっこ。

プロローグ「退屈な日々 前編」

世の中、何が起るか分らない。然るに未来は誰にも予測が付かないだろう。もしかしたら明日、君達は突然、死ぬかもしれない。交通事故に遭うかもしれない、通り魔に襲われるかもしれない。つまり私が言わんとしている事は未来というものは何が起こるか見当が付かないことなので、今日という日を一生懸命に生きる事こそが最善なのだ。ハゲかかった五十代くらいの特別講師は言っていた。だが、浅井直之は特別講師の言っていることに一つも共感できなかった。

学生にしろ社会人にしろ同じ事を毎日、毎日、繰り返しているだけだ。

学校に通って勉強をする。仕事に行って仕事をする。どっちも変わることは勉強の内容や仕事の内容だけだ。

明日になれば突然モテモテになるとか、明日になれば突然天才になるとか。そんな事が起こり得るなら未来は予測が付かないかもしれないが、そんな事はまず起こり得ない。交通事故や事件に巻き込まれる確率は犯罪が多発している今の世の中でもかなり低い。所詮、人は同じ事を繰り返して生きて行くだけなのだ。

部室長屋の一室にある新聞部の窓から校庭で野球ボールやサッカーボールを追いかけている同級生、下級生、上級生が入り混じった集団を見下ろしつつ、五、六時間目に行われた特別授業の内容を否定していた。

横には私物の扇風機が置いてあり、浅井だけに風を送り続けている。

時は六月の半ば。今月分の新聞を発行し終えた新聞部は実に暇で退屈することが無かった。しかし、家に帰っても親が勉強しろと五月蠅いだけなのでこうして部室で涼みながら暇を潰しているのだ。部室の中央に堂々と座しているのは会議室でお馴染み長机。一つ

の列に三人から四人くらいがパイプ椅子を並べて座れるという高性能机だ。

もっとも部員が二人しかいないこの新聞部では無用の長物以外の何物でもない。はつきり言ってしまうだけでかどとスペースを取っているだけで邪魔なのだ。

控え目なノックに振り返った浅井にその邪魔机が真っ先に視界に入り、本当に邪魔な机だと思い直す。

「空いていますよ。ですが、部長は不在ですよ」

投げやりに答えると数秒の後に部室のドアが開き、担任にして野球部顧問の石垣が顔を覗かせた。

「なんだ、浅井だけか？ あいつはどうした？」

石垣の言うあいつとはこの新聞部の部長にして編集長であり、そして新聞部を設立した張本人、岡野弘樹だ。おかのひろき

付け加えれば長身でイケメンで運動神経が良くて勉強も出来る上に頭も切れて冷静沈着。それこそラノベ（ライトノベル）の主人公。いや、最近では平凡な主人公が多いので、親友役か主役的存在とも言えるか。

この新聞部には部活に出る部員は二人しかいないが、名簿上の幽霊部員は数多く存在する上に顧問の教師だって居る。だからこそ学校側にも認められ、部活が成り立ち部費が出ている。それを全て当時一年だった岡野が考え実行に移したのだから行動力も飛び抜けて居ると言う事が分かるだろう。

「表面上の活動を行った後ですからね、今日くらいは休むんじゃないですか？」

表面上と浅井が言ったのは新聞を発行して掲示する事は本来の目的ではないからだ。曲がりなりにも部費をもらっているので学校側に対するポーズでしかない。では、何が本当の目的化と言え、部室に入っただけで右の壁に掲示してあるポスターに全容が記されている。

そのポスターにはこう書かれていた『気になるあの子の身辺調査

から殺人事件に至るまで全ての事件を解決致します、岡野探偵事務所』。と少し控え目な大きさを書かれ、背景は綺麗な青空だった。

勿論、そんなポスターは町中や学校をいくら探してもありはしない。ここだけの限定品なのだ。今の中学生達にはパソコンや携帯電話という文明の利器があり岡野はインターネット上で依頼者を募っている。

つまり岡野は探偵『ごっこ』をやれる事務所的な場所が欲しかっただけなのだ。

以前、自分の部屋を事務所にしたらいだろうと悠希が指摘するとしれっとした顔で岡野は言った。学校であるからこそ面白いんだろう。と。

アホだこいつ。その時、本気で浅井は思った。しかし、そのアホに今まで付いて来たのは心底、一緒に居て面白いと思ったからだ。

「そうか……頼みたい事があったんだがな」

沈黙が続く中、頼み事の内容を聞いて欲しい雰囲気石垣は醸し出し、根負けした浅井は仕方なく尋ねた。

「頼み事ってなあんなんですか？」

「実はな斎木の財布が盗まれたのことなんだがな」

上履きを脱いだ足で扇風機のスイッチを弱から強に切り替えていると思わず反応してしまう単語が出て来た。

学生生活を送っていればその手の事件は一年。いや、半年に数回は起きてても不思議ではない。事実、悠希が一年の時も似たような事件がぼつぽつと発生していた。だが、今回は先週と今週だけで数回、しかも学年を問わず起きた。

こう立て続けに起きるといつもの単発犯よりも事件を身近に感じ、明日は我が身かもしれないと恐怖を抱く。しかし、反面で人間と言うのは本当に愚かで盗難事件が多発している学校に通っていながら、どこか他人事のように考えてしまう者達がいるもの確かだ。

クラスメイトの斎木も他人事のように考えている者の一人だった。だから被害に遭ったのだ。

体育の授業の後、仲の良いクラスメイト数人と戯れていたのが、ゆっくりと教室に戻ると先に戻っていたクラスメイトが何かを騒いでいた。それが盗難事件のせいだと知ったのはジャージを脱ぎ捨て半裸になった時だった。

被害に遭った斎木は悠希の前の席で、机にうずくまり『どうして僕が』と繰り返していたのを浅井は記憶している。

根暗な性格でクラスから浮いている斎木に同情する者は少なく、浅井も斎木自身の警戒の甘さが原因であり自業自得だと思っている。気の毒なことではあるが、そう思われても仕方がないのだ。だから、もし石垣が励ましてやれと言って来るのであれば丁重にお断りしようとした。

「岡野なら犯人を見つけることなんて出来るかもしれないよな？」
断言できる事ではないので同意を求められても困ってしまう。

プロローグ「退屈な日々 後編」

断言できる事ではないので同意を求められても困ってしまう。

あゝ。とか、えゝ。などの曖昧な声を出し、明確な言葉は避けた。肯定するにしても否定するにしても所詮は憶測の範疇でしかない。本人を抜きにして主観だけで語るべきではない。

そうこうしている内に石垣は部室内へと踏み込んできてパイプ椅子にどっかりと腰を下ろす。どうやら長期戦の構えで岡野が来るまでここで粘るらしい。

空気が重い。何かを言って場を和ませようかと思っても残念な事に気の利いた言葉は何一つとして浮かんで来ない。

こんな時、口が達者な弘樹だったらどうするだろうかと普段の岡野の姿を浅井は想像する。

「あゝ、そう言えばもう六月ですね」

まずは当たり障りのない話題から切り込む。そして、
「それがどうかしたか？」

その後は続かなかった。別に六月だからと特別話題にする事など何もない。

大体、どうして季節の話題を口にした。六月だから何だと言うのだ。七月なら夏休み、九月なら体育祭、十月なら学園祭と言う話題があるのにどうして今が六月なんだ。六月には何の行事もない、しかも特徴もない。中体連だって先日終わってしまったし、加えて野球部は一回戦敗退だ。もし、その話題を口にしたら間違いなく半殺しにされる。

口達者な岡野だったらこんな醜態はしない。だが、当然な事に浅井は岡野ではない。

「いえ、ただ言ってみただけです、はい」

焦った末に縮こまりながらまるで自分に言い聞かせるように浅井は答えた。

さつきよりも更に重くなってしまった空気にこれ以上、耐えられない。このままでは押しつぶされてしまう。何か打開策を考えなければ。

恐らくというか多分というか、この時間帯で部室に来ないのなら弘樹はもう帰っている。弘樹が来てこの空気を変えてくれるというのは期待しない方が良く。自分でどうにかするしかないのだ。

そうだ。帰ると切り出せば良いのだ。

じゃあ、僕も帰りますから。

完璧だ。完璧すぎる。もうこれしかない。

そう浅井は決めて浅く呼吸を繰り返し、タイミングを見計らい息を吸い込む。そして、その息を軽く吐き出す感じで言葉を紡ぎ出す。

「あ、石垣先生。僕もそろそろ……」

言い終わる前に不気味な笑い声が部室を包んだ。それはまるで地の底から響いてくるかのようなはたまた天から降り注ぐかのような笑い声だった。

邪魔机、壁の掲示物、これまでの新聞のスクラップ、私物の扇風機、冬に持ち込んだまま放置されているコタツ。部室を見回しても笑い声の発生源は特定できない。

「外、か？」

パイプ椅子から石垣が立ち上がり、部室の片隅に無造作に放置されているコタツの前を通ろうとした瞬間、コタツの中からゆきつと手が伸びてきて石垣の足を掴む。

「うっ、ぎゃああああ！？」 幽霊かお化けかゴーストか！？」

みっともなく取り乱す石垣を見ながら冷静に浅井は指摘する。

「それ多分、弘樹ですよ」

「へっ？」

「ふふふ、ふははは、あゝっはっはっは！！ 最初からコタツの中に居たのだよ！ ワトー」

某有名探偵の助手的存在の人物の名前を口にしようとした時、石垣の右拳が弘樹に容赦なく振り下ろされた。

「いってえな！ 何すんだこの暴力教師！」

「じゃかしい！ お前は俺を殺したいのか！？ もっとぶん殴ってやらんと気が済まんわ！！」

「この程度で怒るとは人間としての器が小さいなあ、だから二十九歳にもなって独身で、三ヶ月前の惨劇が起きたんだよ！」

「あ、あれはお前らにも責任があるんだぞ！」

三ヶ月前の惨劇について少し補足をしよう。

三月下旬、石垣は新聞部に対してではなく岡野探偵事務所に依頼する為に部室に訪れて来た。

何処で岡野探偵事務所の話聞き付けて来たのかは知らないが、その時、別の依頼を頼まれていたこともあり、依頼を蹴ろうとしたが、石垣は依頼を受けない時は新聞部を隠れ蓑に探偵事務所を開いていることを職員会議で取り上げるとまで言ってきた。

一発で廃部になることはないだろうが、後々面倒な事にならないよう、仕方なく依頼を承諾した二人はその内容を聞いて驚愕した。結婚できるように協力してくれ。

それが依頼の内容だった。

驚くなと言う方がおかしい。

石垣の恋の相手は大学生の時の同級生で一時期はとても親しかったらしい。だが、告白できないまま卒業してしまい、以来、連絡も取り合ってなかったが、先日同窓会で再会したのを機に恋心が再燃したとの事だった。

同時期に依頼が二件と言う事もあり、協議の結果、探偵事務所の所長にしてエースの岡野が難題な石垣の依頼を担当し、もう一つの迷子猫の依頼は浅井が担当する事になった。

初めての別行動。しかも一人で上手くやれるかと浅井は正直不安だった。

母校でもある小学校に潜伏していた迷子猫を捕獲し無事に依頼は達成できた時は安心から胸を撫で下ろしていた。そして、それから遅れること一日、石垣の恋も終わりを告げた。

石垣の恋する女性は今年の六月に結婚する予定だったそうだ。最後に女性が石垣に言った言葉は、

「あの頃に、その言葉を聞きたかった」

実際にその場に居た訳ではないので全部、岡野から聞いたことだ。だから浅井には本当にそんな出来事があったのかは確かめる術はない。だが、もし、本当にあったのならとても意味の深い言葉だと思う。

石垣とはあの一件のおかげで生徒と教師という間柄にそれ以上の何か芽生えたような気がする。

過ぎ去った一瞬は二度と戻って来ない。現実は今に続き、そして、そこから明日が生まれる。

ああだこうだと騒ぐ二人に背を向けて窓から外を眺める。夕暮れに染まった空、校庭、運動部の面々。それら全てが日常で当たり前で、とても平和だった。

思い出し笑いとどうしようもなく微笑みたくなる瞬間が重なり浅井はクスツと笑い、口論から掴み合い、殴り合いに発展している二人に振り返って言う。この二人の殴り合いは大事でもなんでもない。むしろいつもの事だ。

「いい加減、本題に入りませんか、石垣先生も何か用があったんですよね」

仲裁の言葉に二人は手を止めて少しの間、睨み合って離れた。

岡野は部長の席に座り、石垣もパイプ椅子にもう一度、腰を下ろした。

どうして本題に入るまでこんなに長くなってしまったのだろうか。隠れていた岡野のせいだ、絶対に。岡野の後頭部を睨みながら浅井は椅子には座らずに窓に背中を預け、長話を聞く体勢を取る。

「それで、今回はどのようなご用件で？」

本当に変わり身の早い。しかも、口調どころか身に纏っている雰囲気までも変えられるのだから凄い。

今の岡野は探偵という雰囲気があると浅井は思う。いや、本物の

探偵には会ったことないが恐らく、こんな感じではないだろうか。

「最近、盗難事件が多発しているのは知っているな？」

「ええ、勿論。有名ですから」

確かに有名と言えば有名だ。全校生徒が知っているくらいには有名だ。

「実は今日、ウチのクラスの齋木って奴も被害にあったな」

「ああ、確か二年二組。浅井君と同じクラスですね。ええ聞き及んでおります」

「その齋木の親御さんから電話があつてな」

電話の内容を逐一、話すと長くなるらしいので石垣は要点を掻い摘んで話した。それによるとどうやら齋木の両親は『財布を盗まれたのは担任であるお前のせいだ。すぐに犯人を捕まろ。捕まえたら家まで連れて来て土下座させ、全額に加えて賠償金も払え』という要求をしてきたそうだ。

なんとも無茶苦茶な話である。それに元々、中学校には財布等を持ち寄ってはいけないという決まりがある。

決まりを無視して被害に遭ったのにその言い分はどうなんだろう。石垣の心中を察する訳ではないが浅井は少し腹が立った。

「成る程。盗難事件の犯人を捕まえて欲しい。それが今回の依頼ですか？」

「話が早くて助かる。じゃ、俺は野球部の奴らを見に行くんで宜しくな」

石垣が部室から出て行くと岡野はすぐに右手で指をパチンと綺麗に鳴らした岡野は肩越しに浅井を見る。

「浅井君は同じクラスだったね。事件の状況を詳しく話してもらえないか？」

「僕の知っていることならね」

時間にすれば数時間前の出来事だったので忘れるはずもなく、浅井は知っている限りの事を岡野に説明した。

「ふむ。体育の授業中による犯行か。犯人は同じクラスの奴という

線は？」

「それはないよ。授業中に保健室に行った奴はいないし。女子は知らないけどさ」

それだけを聞くと岡野は立ち上がりさっさと帰り支度を始める。

もう帰るのかと浅井が尋ねると岡野は答える。

「今日はすることがないからな。さっさと帰って調査は明日からだ」
「まっ、それもそうか」

扇風機のスイッチを切って邪魔机の上にある学校指定の鞆を背負う。

本格的な探偵の依頼か、これから忙しくなりそうだ。

そんな直感にも似た感情を抱きながら、浅井は岡野と一緒に部室を後にし帰路についた。

第一話「正義の味方」

次の日の朝、登校した浅井が鞆から教科書やノートを取り出し机の中に入れてみると視界の片隅に斎木が入った。

空になった鞆を肩に提げ立ち上がり、椅子に座っている一人ぼっちの斎木を見る。未だにクラスに溶け込めず仲の良い友達を作れない斎木に憐れみのような感情を抱き後ろのロッカーに向かった。

他人の目が一切気にならなければクラスで孤立している斎木にも声をかけられるのだろう。だが、浅井は他人の目がとても怖かった。変だと思われなかった。だから、斎木に声をかけることが出来なかった。

一人ぼっちの寂しさ、クラスメイトから影口を言われる辛さ、笑いのネタにされた時の悲しさを小学校の時に浅井は全部、経験した。いじめと言う名の地獄を通して。

「おうすっ。今月の学校新聞、見たぜえ。俺の記事がバッチリだな！」

鞆をロッカーに入れる為に屈んでいた浅井は頭をばっこんぽっこん叩かれ、その頭上に陽気な声が降って来た。

首を回し後ろを見上げると無駄に図体でかく、一見して体育会系と言える男子生徒が鞆を片手に立っていた。

まったく手加減と言う言葉を知らないのか。集中的に叩かれた箇所への痛みは内心、抗議しながら浅井は立ち上がる。

「個人戦で唯一、県大会に出場した柔道部のエース様だからね、扱いも格別さ」

柔道部のエースこと佐川は三段あるロッカーの一番上に鞆を力任せに詰め込み、上機嫌で答える。

「前々から、中体連の記事は俺だって決めてたんだろ？ いや、俺も記事に見合うようにって思ったわけよ」

新聞部の歴史は一年と日は浅いが、学校の各行事で目立った生徒

のインタビュー記事や部活動、紹介。生徒会の言葉や先生方の裏話と言った多彩なコーナーと本物さながらの記事で既に一部の生徒には人気があり、多大な支持を受けていた。

人気が出れば出る程、真面目に記事を書かなければと思ってしまい、浅井は日頃からネタ探しには余念がない。最近は一回の発行で取り上げるネタが多くなって来たのでいっそのこと新入部員でも入って来て欲しいと思える。

「正確には野球部やサッカー部など、メジャーな部活動がこけてしまったが為に白羽の矢が立ったに過ぎない事実を佐川翔太は知らないのであった。まる」

「声に出してんじゃねえか！ 悪かったねえマイナーな部でさ！！」

「マイナーな部とは言っていないさ」

マイナーとは言っていない。少なくとも柔道は日本でも屈指の知名度を誇っている。日本全国、ほとんどの中学校と高等学校には柔道部が存在していることから知名度の高さは頷けるだろう。

尤も学校社会において花形と言える部活動は陸上部やサッカー部、野球部にバスケット部などで柔道部は知名度はあるものの人気はあまりない。浅井達が通っている中学の柔道にはイケメンがいないことも人気停滞の一つの理由かもしれない。

その事実を出来るだけ簡潔に教えると、佐川は肩を落とす。

「いいよなあ、バスケット部の丸山とか野球部の菊池なんか彼女いるしモテモテだもんなあ。それに比べて俺達は……」

「まあ、そう肩を落とすなよ。柔道部には紅一点の小橋さんがいるじゃないか」

紅一点と言えば聞こえはいいが、その身長は浅井よりも遙かに高く、その体重は中学女子はおろか男子の平均を大きく上回り、挙句の果てには男子生徒をパンチ一撃でKOした過去を持つ女子生徒である。はつきり言って恐ろしい。

「あんな女じゃねえよ、ありゃ男だ……あれ、そーいやなんでお前、俺と同じく県大会に出場した小橋のインタビュー取ってねえん

だ？」

「いや、一応取材はしたんだけどさ、『捏造報道反対！ マスメディアのあるべき姿を』って言われて追いつかれたんだよね」

「どういうこった？」

「やや！ なんとおゝ斎木君があゝ！」

さあ？ と浅井が首を捻るが早いか遅いか、教室の前の方で誰かが大声を出した。

それまでそれぞれの喋り声や笑い声で騒がしかった教室中がシンと静まり返り大声を出したクラスメイトに視線を集中させる。

いつも授業中に騒ぐ五人グループが斎木の机を取り囲み、何かを取り上げていた。

「告白の手紙を作成してありましたああゝ！！」

「おおお——」

リーダー格の生徒が購買部で購入できる便箋を持った手を頭の上まで上げてひらひら動かしていた。取り巻きの四人は盛り上げる為に大声を出したり、拍手をしたり手笛で囃し立てたりしていた。

「もうさあ、これマジで気になるっしょ？ どう？ 気にならない？」

少しの間後、

「なるなる、マジでなる！」

「早く公表しろよ！」

「言え、言っちゃえ！！」

クラス全体で斎木を笑い者にしようと決まった瞬間だった。

水は低い方に流れる。そして、人は立場が強い方、高い方に流れる。

斎木を擁護しようと言う者は誰もいない。いや、誰もが内心では可哀想に思っているのかもしれない。だが、自分が爪弾き者にされないように、斎木の立場まで落ちないようにと斎木を笑い者にするしか選択肢がないのだ。

「さあて、では皆さんお待ちかねゝ、告白のお相手はゝ」

焦らす様に一言一言の語尾を伸ばし、周囲からは早く言えなどの野次が飛ぶ。

これはもう誰の目から見てもいじめだった。

二人に取り押さえられている斎木の姿がいじめられていた頃の自分と重なった。だが、いじめを止めようと足を前に踏み出す勇気がない。

ここでいじめを止めてどうする？ 次には自分が対象になるだけだ。意味がないし、危険でもある。またあの地獄に戻りたいのか。そんな自己保身な考えしか浮かばない。結局は浅井も大多数のクラスメイトと同じ穴のムジナということだ。

こんな事は止めさせたいと思う自分。いじめの対象が自分ではなくてほっとしている自分。そして、何も行動できない弱虫の自分に浅井は嫌悪感を覚えた。

その時、斎木の表情が見えた。まるで今にも泣き出しそうで誰かに必死に助けを求めているかのような表情だった。

どうしてこんな事をするのか。どうして誰も助けてくれないのか。人を笑い者にして楽しいのか。いじめられていた頃、ずっとそう思っていた。そして、見て見ぬ振りをする他人を恨んだ。最低だとも罵った。

浅井は過去の自分が最低だと思っていた大多数の人と同じ事をしていると感じてしまった。

決めた。いじめを止めようと浅井は決意した。しかし、

「やめとけ」

一歩前に踏み出した浅井の右手を佐川が大きな手で掴む。

「でも……！」

「お前が言っても素直に従う連中じゃねえよ。それに、さっき窓から正義の味方が見えたからな。もうすぐここに来る。人任せって思うかも知れねえけど、正義の味方に任せるのが一番良いんだよ」

「……正義の味方？」

一体、何の事か分からなかった。

そんな特撮ヒーローみたいな存在がこの学校にはいるのか。今まで一年間通って来て見た事も無ければ聞いた事も浅井にはなかった。

「斎木君が好きで好きでしこってる相手はくおか——」

リーダー格の生徒が言葉を途中で切ったのは良心の呵責によるものではない。盛り上げる為の演出でもない。声を上げるという当たり前の行動が不可能になったただけだ。

ほんの一瞬でリーダー格の生徒は宙を舞っていた。

テレビなら決定的瞬間をスローモーションリプレイするのだろうが、テレビではない。あの一瞬は二度と見れないし、見逃した者は何が起こったのか理解できないだろう。

入り口から斎木の席までの短い距離で見事にスピードに乗り飛び蹴りをかました女子生徒は無様に倒れるリーダー格の男から便箋を取り上げ、取り巻き四人に一瞥をくれると一言、大声で怒鳴る。

「あんたらも男ならこんな陰険なことしてんじゃないわよ！」

正義の味方のご登場だった。

第二話「仮病と親友と保健委員とその他」

赤い戦闘服を着ているわけでもなければ仮面で顔を隠しているわけでもない。夏服のセーラー服に長く綺麗な黒い髪。

怒りを露にした目付きで主犯の五人組と、その五人に乗っかって騒いでいたクラスメイト達を睨み付ける。

正義の味方。それは皮肉でもなんでもない、本当にその言葉通りだ。

「よってたかって一人をいじめて楽しいの？」

それは誰に投げ掛けた言葉だったのだろう。

正義の味方の問い掛けに答えられる者は浅井や佐川も含めて誰も居なかった。

重苦しい静寂をチャイムが切り裂く。それを合図にクラスメイト達はバツが悪そうに自分達の席に戻って行き、蹴り倒されたリーダー格の生徒も大人しく引き下がった。

「おい、いつまで突っ立ってんだ？」

「あ？ ああ」

斎木の後ろ、佐川の前にある自分の席に浅井は座り、廊下側の一番前の席に座っている正義の味方を見つめる。

二学年で誰が一番可愛いかと聞かれれば十人に八人はその名前を口にするであろう容姿を持ち運動部には入っていないくほとんど帰宅部扱いのパソコン部員。だが、体育や体育祭でも活躍する類稀な運動神経を持つ。それが正義の味方の正体。名前は確か、

「どうした？ 早河にでも興味持ったのか？」

そう、早河はやかわかな加奈だ。

「そんなんじゃないよ。ただ、凄いなと思ってね。佐川は前から知っていたのか？」

「あいつとは小学校が一緒だったからな。有名だったぞ？ 男子数人と喧嘩しても余裕で勝つ化け物じみた強さってな。あの五人もあ

いつには文句の一つも言わなかったろ」

力で勝ち得た立場の強さ。それを利用していじめられる弱い立場の者を守る。本当に正義の味方そのものだ。

「かなり可愛いし発言力もあるからな。どんな目茶苦茶やってもいじめられるタイプではないよな。てかあいついじめたら実力行使でボコられるし」

あの細身の身体のどこにそんな力があるのか。確かに飛び蹴りで蹴り倒したのには驚いたが、流石に沢がの言い分は話半分のような気がしてならない。

ふと早河がこちらを振り返り、浅井と目が合う。

睨み付けられてしまい心臓を鷲掴みにされた時のようにビクッと驚く。

「起立」

学級委員の声が聞こえ、慌てて立ち上がった。

教卓の前に立っている石垣の顔を見ると、

「あっ」

思わず声が出てしまった。

現実に取り戻された。という訳ではないが依頼の件と昨日の帰り道に岡野と話し合った作戦のことについて思い出した。

一時限目に仮病を使って保健室で落ち合う。

水曜日の一時限目は数学。担当教師とはあまり良好な関係を築けていないので、休み時間の内に保健室へと駆け込んでおこう。

これからの行動についてじっくりと考えている内に定番の朝の会は終わり、さっきと同じように起立、礼を行う。

偶然か必然か石垣と視線が交じり合い、浅井と石垣の二人は同時に頷いた。

振り返り、佐川の肩を軽く叩く。

「悪い、何か腹が痛いから保健室行く。次の授業時、先生に言ってくんねえ？」

「ああ、別にいいけど。突然だな、大丈夫か？俺も前に突然わき

腹が痛くなった時は盲腸だったんだ」

心配させて悪いけど、仮病だから。なんて口が裂けても言えない。それくらい盲腸経験者の佐川は心配そうだった。

「ちよつと……浅井、君？」

保健室に向かおう右足を踏み出そうとした時、背中に声が投げ掛けられた。顔を向けなくても声で分かる。正義の味方の加奈だ。

振り返るべきか、それともこのまま気付かないふりをして行くべきか。

後で無視したのかと問われても自分に向かって言っただのか分からなかったと言いつつ訳をすれば大丈夫だ。ただでさえ、浅井は普段から女子と会話をしない。いや、正確にはしないと言うよりも出来な

いか。
「あゝ、早河。こいつ腹が痛いらしくてさ、何か用なら後にしてやってくれ」

佐川のフォローにすかさず浅井は腹部を押さえ、痛いふりをする。

「えっ？ お腹痛いの？ どの辺？」

すぐに加奈は浅井に駆け寄り、優しく背中に右手を添えて左手で左脇腹に触れる。

「痛いのはどの辺り？ 盲腸だったらまずいわよね」

フワリと良い匂いが浅井の鼻につく。

シャンプーや香水とはまた違った感じの甘い香りに加えて同年代の異性とここまで密着したのは生まれて初めての出来事だったので軽く動転してしまう。

心臓の鼓動がやけに早く、耳元で心臓の音が聞こえているのかと思えるくらいに大きい音を立てていた。

周囲にも心臓の音が聞こえているんじゃないかと要らぬ心配を浅井はしていた。

「浅井君？ 浅井君？」

「あっ……え、と、あ、はい？」

「顔が赤いし熱もあるんじゃない、確か盲腸って発熱もあったわよ

ね？」

同じ小学校出身だから面識があるのか加奈は佐川に向かって尋ねた。が、佐川が答えるよりも早く明後日の方向から答えが返ってくる。

「それは違うな。腹の痛みと発熱が伴うのは腹膜炎だ。ちなみに症状が重くなると意識を失い天に召されることも多々ある、危険な病だ。一刻を争う、俺と一緒に早く保健室に行こうではないか」

浅井と加奈と佐川が同時に顔を向ける。

岡野がそこにいた。

岡野は素早い動作で浅井の右腕を首に回し、しっかりと支えながら歩き出す。

「ちょ、ちょっとあんた別のクラスでしょ？ このクラスの保健委員はあたし……」

「この際、クラスや委員会の問題ではないだろう。それに上っ面だけの保健委員なんぞよりずっと深い関係なんだよ、親友だから俺達は。その親友が今にも死にそうなんだ、黙っていられるか」

何だか話がどんどん大事になっているような気がしてならない。

一時限目が終わればここに舞い戻って来るしかないのにこれ以上、大事になれば簡単に戻って来れない状況になる。それはまずい。

「あ、いたたたたあ」

この場から遠ざかりたい一念で一計を案じた。

あまりの痛みから緊迫した叫び声。というよりはどこか間の抜けた演技のような痛みが方だった。

それでも岡野は過剰反応をしてフォローを入れる。

「今すぐ保健室に連れて行ってやるぞ、それまで死ぬんじゃないぞ！」

大声に教室に居た全員が驚き顔を上げ、視線を浅井と岡野に集中させる。

すみません。本当に下手な演技をした僕が悪かったです。だから、これ以上、本当に大事にしないで下さいお願いします。

衆人環視の中、岡野の肩を借りてゆつくりと教室から退場する間、浅井はぶつぶつと独り言を呟き続けた。

第三話「容疑者」

肩を貸してくれてかつ慎重な足取りだったのは階段の途中までだった。

チャイムの音と共に岡野は浅井から離れ、一人ですんずん進んでいく。

二人は無言のまま階段を降りて二、三年生用の昇降口前の廊下の右手には部活動連絡用のホワイトボードがあり、その近くには校内で唯一の床置き型冷水機が設置されている。左手には二階へと続く階段がある。保健室の入り口はその廊下の先、避難用の非常口の横にある。

岡野がドアを押し開け、二人は保健室の中に足を踏み入れる。

左右にスライド式ではなくドアノブを回し押し開けるタイプのドアを使っているのはここくらいだ。

「もう授業始まってるよ」

出迎えてくれたのは若くて美人で理解のある保険室の先生。ではなく四十台半ばでふっくらしていて中々、保健室で休ませてくれないう事で知られている眼鏡のおばちゃんだった。

「具合が悪いので保健室で休ませて欲しいのですが」

岡野がそう切り出すとおばちゃんは眼鏡を光らせて、浅井と岡野を順番に見る。

「二人一緒にかい？ おかしな話だねえ」

思いつき怪しまれている。が、確かに二人一組で保健室に来れば怪しさ満点だ。

「いえ、僕は偶然そこで会って……」

そこで岡野は激しく咳き込んだ。おおよそ演技とは到底思えない迫真の咳き込みだった。

「まあ、熱でも測って」

おばちゃんは顎をクイっとしゃくらせ体温計を差す。自分で取れ

と言っているのだ。

あまりの冷酷さに遠い世界。詰る所、二次元の世界に必ず居る優しくて美人で若い保険室の先生をつい想像してしまう。巨乳だったりしたら尚更高得点だ。

近くの椅子に腰掛けて体温計を脇腹に入れる。肌に触れる部分が冷えていて浅井は肩をすくめた。

待つ事、数分。体温計の電子音が鳴り響き、浅井は脇から体温計を引き抜きデジタルで表示される体温を見た。

どうせ平熱に決まっているのだから発熱で休む事は諦めて、腹が痛いということでゴリ押しをしようと思っていた。が、実際に表示されていた体温は三十八度五分だった。

ちよつと待ておかしい、これは。

頭も痛くなければ気分が悪い訳ではない。加えて間接も痛くないし何より寒気もしない。しかし、体温計は高熱を表示している。

ふと馬鹿は風邪を引かないという言葉が思い浮かぶ。中学生にもなれば日本中の誰もが知っているであろう。だが、本来の意味は愚鈍な者は、風邪を引いたことに気が付かない。馬鹿は、それだけ鈍感であるということらしい。

簡単に言えば馬鹿は風邪を引いた事に気付かない。

これは浅井にとって少なからずショックだった。確かに数学の成績は壊滅的だが、社会や国語は九十点以下を取った事がないし、全教科合わせての順位は真ん中くらいだ。いや、学校の成績だけが全てではないのかもしれない。

自分が馬鹿だったとは誰でも認めたくないだろう。浅井も認めたくはなかった。

思いがけない所で失意のどん底に突き落とされた浅井は茫然自失のまま、おばちゃんに体温計を渡す。

岡野と浅井の体温計を交互に見比べた後、おばちゃんは保健カード入れを指差す。

「必要事項を保健カードに記入したら、ベットで休んでよし」

軍隊かここは。

馬鹿宣告のショックから少しは立ち直った浅井は内心で毒づきながらも二年二組の保健カードが置かれてる場所から自分のを持ち出し、ボールペンを持つ。

症状、熱、措置などを簡潔に記入して元の場所に戻す。

その際、ちらっと岡野の保健カードを見ると、熱の部分に三十九度と記載されていた。

ここで二つの可能性が挙げられる。

岡野も浅井と同じく馬鹿ということ。もう一つは何かしらのトリックを使って不正に体温計の温度を吊り上げた事。

前者なら仲間が出来て精神的に楽になるのだが、岡野に限ってそれは無いという事を浅井が一番、良く知っている。恐らく何かトリックを使ったのだろう。

三つベットは並んでいて、浅井は右側のベットにもぐりこみ周囲をカーテンで遮った。岡野は一番左を使ったらしく、真ん中がぼっかり空いている。

これからどうするかは全く打ち合わせしていないので、取り合えず横になる。

仮病を使って保健室で休む事と盗難事件がどう結び付くのかは浅井には到底、考えも及ばない。ただ、岡野を信じて付き合うだけだ。どれくらいの時間が過ぎただろう。いい加減、うとうとし始めていると控え目なノックの音が聞こえた。

「すいません。少し職員室まで宜しいですか？」

石垣の声が聞こえた。小言でおばちゃんと何かを話しながら保健室から出て行く。

「おい、ユキ。ちゃんと起きているか？」

ユキというのは浅井の仇名で由来は名前の下二文字。あまり男らしくはないのでそう読んで欲しくはないというのが浅井の本音だ。

「起きてるけど？」

言うが早いか岡野がカーテンを開けるのが早いか微妙なタイミン

グだった。

カーテンを開けた岡野はメモ用紙を浅井に手渡す。

「石垣が時間を稼いでいる間に保健カードを手分けしてチェックするぞ」

と言う事は石垣がおぼちゃんを連れ出したのは事前の打ち合わせだったのか。

「チェックって何を？」

「そのメモに書かれている時間帯に保健室を利用した生徒が居るかどうかだ。学年は問わない」

メモを見ると、日付の横に時間が書かれていた。

一つの仮定を浅井は閃いた。

「これ、もしかして盗難事件があった時間か？」

六月六日。十一時四十五分から十二時三十五分。

犯行時間は四時限目の開始から終了の間。つまりメモ用紙に書かれている時間と言う事だ。

「犯行は六回。その全てを保健室で過ごしているとは限らない。一回でも一致する奴が居たらピックアップしておけ」

「だけど、犯人が一回も保健室を使っていなかったら？」

「その可能性も大いにあるが、授業中に抜け出すと言ったら保健室くらいしか行き場がないだろう。トイレに隠れるにしても見回りの先生とぶつからないとは言い切れないし、もし見つかって問い詰められたらその場で御用だ。犯行の後、保健室に駆け込むのが一番安全だからな。それに、今は情報が少なすぎる。どんなに可能性が低くても思いつく限りのことはする。それが俺達だろ？」

最初から出来ない、無理だ、そんなこと有り得ないと勝手に決め付けるのは簡単だ。だが、決め付けてどうなる。何を得られる。

そうやって屁理屈を捏ねて何も行動しないよりは、どんなに可能性が低い事でも行動する方が何かを掴めるに決まっていると浅井は思った。

岡野は既に一年の保健カードをチェックしている。浅井は二学年

の保健カードを取り出すと一組から順に目を通して行く。

情報保護法のこの時代に他人のプライバシーを覗くような行為は
かなり法に触れてしまっているような気がしないでもない。

罪悪感はある。しかし、それ以上に焦燥感が強い。いつ保健のお
ばちゃんに戻ってきて背中^{せなか}に怒声を浴びせられるかと思うとひやひ
やする。

一組には該当者は居なかった。

続いて二組の出席番号一番、浅井直之という名前が目に入った。

初めての記入は今日の日付で数十分前だった。

速攻でめくり二番、三番と見ていく。

見ていく内に案外、保健室の利用者は少ないということは分かっ
た。

健康一番と言えば聞こえはいい。まあ、あんなおばちゃんが居座
っている保健室で仮病を使って休むという猛者はあまり居ないだろ
う。

余計な事を考えながら保健カードをめくろうとした手を浅井は止
めた。

六月六日の四時限、六月十日の二時限、六月十二日の五時限、六
月十五日の一時限に保健室を利用している男子生徒が居た。

四回の利用とも犯行があったと思われる時間帯。利用者は二年二
組出席番号十番。高宮進一。^{たかみやしんいち}一年の頃から同じクラスで浅井も良く
知る生徒だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1738i/>

僕達の探偵ごっこ

2010年12月21日02時54分発行